

# 児童文学『クマのプーさん』における、キャラクターと世界観の考察

外国語学部 英語英文学科 4年

田中 稜平

## ○はじめに

現在、『クマのプーさん』というタイトルを目にして、頭に何も思い浮かばないという人はほとんどいないだろう。プーというキャラクターは、日本を含む世界中の子供たちにとっても親しまれており、ぬいぐるみやストラップなど、様々なグッズとして日常の中で見ることができる。

しかし、それらのプーのグッズのほとんどは、原作ではなく、ウォルト・ディズニーによってアニメ化された数々の映像作品を基にしたものである。そのため、『クマのプーさん』の原作の物語を読んだことがあるという人は、残念ながらとても少ない。

『クマのプーさん』の原作は、1926年にイギリスで出版された、A・A・ミルンによる児童文学である。ジャンルとしてはファンタジーに分類され、作品の内容は、森の中で擬人化した動物たちと一人の少年が一緒に遊び、助け合い、仲よく暮らすというものである。今ではディズニーの映像作品が子供を中心としてよく親しまれ、多くの人の『クマのプーさん』という作品のイメージを形作っている。だが、原作はディズニーの作品のようなわかりやすく子供を楽しませる要素だけではなく、文章の中に隠されたミルンの考えや価値観、子ども特有の思考などを読み取ることができ、単なる子供の読み物という範疇に収まらない、特別でかつ、魅力的な本である。

この論文では、A・A・ミルンによる『クマのプーさん』及びその続編となる『プー横丁にたった家』の二冊を対象に、これらの作品でミルンが類まれな想像力で描いた世界観について二つの観点から詳しく述べていきたいと考える。なお、作品の本文の引用においては、すべて石井桃子訳を表記する。

一つ目の観点は、登場するキャラクターの造形についてである。この作品の登場人物のほとんどは、擬人化した動物であり、それぞれが内面的な個性、考え方などのアイデンティティーを持っている。ファンタジーの中には、架空世界の中に人間や動物を現実性に則して描いたものも多いが、『クマのプーさん』の世界では、舞台だけではなくキャラクターにおいても現実性は排除され、自由にミルンによって造形されている。そのため、作品の主要なキャラクターがどのような内面を持っていて、どのように立ち振る舞っているかを調べることは、作品全体の世界観を知る上で欠かせない鍵となるだろう。

二つ目の観点は、ファンタジーの母体となる、キャラクターたちが生きる世界、環境についてである。前述したキャラクター性を踏まえて、よりマクロな視点で作品世界を考究する。主としては、ミルンの描く架空世界と現実の世界との相違点と、それが示唆する内容について考察するほかに、作品に登場するキャラクター全体に共通する考えを抽出する。登場するキャラクターはすべてミルンによって造形されているため、その内面の部分、いわゆる心の部分にも何かの共通性、一貫性があるはずであり、それは作品の核となる理念に繋がるものであると考える。

## 第一章 キャラクターの造形について

### ○概要

この章では、この作品に登場するキャラクターの造形、個性について考えたい。

この物語に登場するキャラクターは、各々の個性がとてもはっきりと描かれており、子供でも本

を読めば、それぞれのキャラクターがどのような性格なのか、わかりやすく知ることができる。キャラクターの内面の造形がとてもシンプルに明瞭に作られていることは、この作品が人気を博した一因であることは間違いない。複雑で多面性を持つキャラクターでは、子供にまっすぐにその性格を印象付けることが出来ないからだ。

また、ミルンのキャラクターの描き方にはある特徴がある。ドミニク・チータムは、「ミルンは登場人物の様子を描写することはない。つまり、『プーは背がこのくらいで、目の色はどのよう、毛はこんな感じで、食べ物は何が好き』などとは書かないのである。彼は登場人物の言動を通じて、その性格を読者に示すのだ。」と指摘している。ミルンはこのような描き方が一番子供にとって受け入れやすい形だと感じていたのではないだろうか。ただ単に文章で何かを説明するのでは、子供にとってそれは物語そのものではなく、情報として感じられてしまい、味気ないものになってしまう。その点、ミルンの登場人物の言動でその性格を読者に伝えるという手法は、読者にとってみれば、実際の生活で様々な経験を通して知識を得ていく過程と類似しており、子供にとっても作品の世界から思考を逃がさず、より生き生きとした印象を与えることが出来たのではないだろうか。

### ○プーにとっての食べること

次に、物語の主要人物に焦点を当てて詳しく述べていく。

物語の主人公、プーは一言で説明すると、のんびりしていて、食べるのが好きで、少し頭の悪いクマである。

プーは物語のいたる場面で食べ物のことを考えている。とくにはちみつやコンデンスミルクなど、子供の嗜好と同じく甘いものを特に好むようである。

それから、プーは、何週間前から、十一時五分までとまっている時計を見あげると、うれしそうにいました。

「もうかれこれ十一時だ。きみ、ちょうどうまく、なんかちょっとひと口つまむ時間に来たんだよ」

(A.A. ミルン著 石井桃子訳 『プー横丁にたった家』 p18)

この場面は、食べることに對するプーの心情がよく読み取れる箇所である。プーはおそらく、ちょうどいい時間で時計が止まったのを好都合に、あえて時計を止めたままにしているだろう。そうすれば、プーはいつでもその時計を見るたびに、ちょっとした何かを食べる口実を得ることが出来るからである。

物語を読むに、プーが食べるのが好きであることは間違いないが、彼は大食いであり、食べ物への執着が強いというわけではない。どちらかという、豪華な夕食を食べると言うよりも、ちょっとした時間にちょっとしたものをつまむことが好きだという印象を受ける。プーにとって食べることの幸せとは、食べることが楽しいという点にある。だから、いつでも食べることを考えており、時に食べ過ぎて穴から出られなくなったりもするが、決して他の仲間と食べ物を取りあったり、豪華な食事をして慢心することはない。プーにとって食べるということは、素直な喜び、日常生活で享受する自然な楽しみの一つであり、それ以上でもそれ以下でもないのだ。

この作品では、複雑な感情はほとんど出てこない。それぞれのキャラクターがそれぞれの欲求に従い、素直に行動する姿勢がみられる。それは、子供にとって一番分かりやすい、生き方のお手本のように映る。

### ○プーの思考力

プーはとても頭の悪いクマである。複雑なことを考えることは苦手で、読み書きもできない。プー自身も少なからずそれを気にしており、物語のなかで様々な失敗をしてしまい、“Bother!” 「いやんなっちゃう!」、と自身を責めている。しかし立ち直りも早く、プーは楽しく生き生きと日々を過ごしているため、決して深刻には映らず、むしろそれすらもプーの魅力の一つとして認識できる。作品の中でプーの一番の親友であるクリストファー・ロビンは、そんな間抜けなプーのことを、作品のいたる個所で “Silly old Bear!” 「ばっかなクマの

やつ」と呼ぶが、その言葉には親愛の念が込められており、むしろプーの愚かでも憎めないところを楽しんでもいるようだ。

次に引用する場面は、プーの大事な友達であるコブタが留守中のプーの家のベルを叩こうとしているが、手が届かずにはねているところを、プーが家に戻ってきてそれを発見する場面である。

家のまえまでくると、コブタがきていましたが、戸たたきに手が届かないので、ピョンピョンはねているところでした。(中略)

「きみ、なにしてんの？」

「戸をたたこうと思ってね。いま、きたとこ。」

「じゃ、ぼくがたたいてあげよう。」

プーは、こうしんせつにいうと、手をのばして戸をたたきました。それから、

「(中略)それにしても、だれだか知らないけど、この家のひとは、なんてなかなか出てこないんだろ。」

そうして、プーは、もういちど、戸をたたきました。

「でもプー。」とコブタがいました。「これ、きみの家だよ。」

(A.A. ミルン著 石井桃子訳 『クマのプーさん』 p119)

この場面は、プーの数ある失敗の中でも、とりわけチャーミングなものではないだろうか。何しろプーは目の前の家が自分の家であることを忘れて、二度もドアをノックするのだ。プーの難しい言葉を知らないといった特徴は、主な読者である子供にとっても当てはまる部分かもしれないが、この場面のような失敗は、脳がまだあまり発達していない子供でもすることはないだろう。プーは、根本的に子供とは違う次元で物事を履き違えることがある。これはミルンによる意図的なものである。

ミルンは、主人公のプーを、子供の読者から見ても、「プーは自分より頭がよくないぞ」と思わせたかったのだろう。プーは子供向けの本でよくありがちな、悪者を倒すヒーローのようなタイプの主人公ではない。物語の中では戦いの一つすら起こらず、プーとその仲間たちの楽しくて、おかし

く、平和な日常が描かれるだけである。そのような世界では、主人公は利発で頭が切れているよりも、実際のプーのように頭が悪くてのんびりした性格の方が、「何てプーは間抜けなやつなんだろう」と、親近感や魅力を子供に持ってもらえるのではないだろうか。事実、プーはもともと作者の実の息子のクリストファー・ミルンの、一歳の誕生日に贈られたぬいぐるみが基になっている。ミルンは、プーを子供の「可愛いぬいぐるみ」のイメージを崩すことなく作品に登場させ、活躍させる(あるいは失敗させる)ことに成功していると思われる。

また、引用した場面のように、プーの失敗は大概、状況を深刻にしたり、危険を招いてしまうものではなく、単なるおかしさ、ユーモアとして機能する。ミルンは色々な失敗をしてしまうプーを描くことで、子供に親近感を持ってもらうだけでなく、作品のところどころにユーモアを忍ばせて、作品全体をより魅力溢れ、面白おかしいものにしていくのだ。

### ○自己の本性に従って生きること

『クマのプーさん』のキャラクターは各々、特徴的で明快な性格を持っていることは前掲したが、ここではそのキャラクターの個性の核となるもの、所謂本性と呼ばれる部分について深く論及したい。

「やっぱり、ぼくが、」

さいごの枝にわかれを告げると、三度ばかり、でんぐりがえしをうって、しなやかにハリエニシダの木の中かにすべりこみながら、プーは、こう考えた。

「やっぱり、ぼくが、あんまりミツがすきだから、いけないのさ。あ、いたっ！」

(A.A. ミルン著 石井桃子訳 『クマのプーさん』 23p)

この場面は、プーがハチミツを食べたいがために木に登ろうとするが、途中で落ちてしまい、自分がハチミツが好きなのでこんなことになってしまったと悔みながら、地面に着陸する場面である。

プーはそのよくない頭で、なぜ自分が木から落ちてしまっているのかを冷静に考え、「ハチミツが好きだから」と自分の変えることのできない個性、本性のせいだと結論付ける。しかし、ここで自分に不幸をもたらした自分の本性を嘆くことはあっても、否定することはしないのである。

人間は誰しも、自分の持つある特徴が災いして失敗したり害を被ったら、その自己の特徴を否定してしまいがちではないだろうか。しかし、プーはそうはしない。ハチミツが好きというプーの本性は、もし否定したとしても変えられるものではなく、プーというパーソナリティーを形成する大事な要素なのだ。

他のキャラクターもそれぞれにそれぞれの良さ、あるいは弱点、異なる本性を持っている。例えば、コブタは思いやりがあり、優しい性格だが、臆病ものである。ロバのイーヨーは陰気な性格をしており、全ての物事を悲観的に考える。しかし、どのキャラクターも自己の弱点を否定しようとすることはない。受け止めようとするのである。

また、他人に対しても、クリストファー・ロビンがプーに向かって親しみをこめて茶化したりすることはあっても、各々の弱点を責めたり、批難したりすることはないのである。

このことからミルンは、人間というもの自分の本性に従って生きることが、一番幸せであり、最も自然な生き方であるという考えを持っていたのではないだろうか。特に物心がついたばかりの子供は、何か他人と違うことに対して、ひどく敏感である。なぜならその自己の持つ個性のせいで、仲間外れにされるかもしれない。子供にとって、他人と違うことは怖いことなのだ。

しかし、ミルンの作品世界の中では、それぞれの個性がまるで虹のように煌めき合っている。みんながそれぞれ、違う個性を持っていることは、みんながそれぞれ、違った魅力を持っているということだ。自己の本性とは、生まれてから死ぬまで一生付き合わなければならない。だからこそ、ミルンは感受性の深く、人格が形成される子供の時期に、そのことを作品世界で表現し、人それぞれ違った個性の魅力を感じてもらいたかったのではないかと推察する。

### ○親としてのクリストファー・ロビン

次に、プーと並ぶ重要なキャラクター、クリストファー・ロビンについて、論じたい。プーが物語の中心で活躍するキャラクターとすると、クリストファー・ロビンはプーや他の動物をそばで見守り、困った時には助けるというキャラクターである。

この作品には、大人の人間は登場しない。そのため、動物たちにとってクリストファー・ロビンの存在は、何か困った時の心の拠り所となる。

事実、『クマのプーさん』の第一節でプーがハチミツを取れずに考えるときに一番最初に思い浮かぶのは彼であるし、他の動物たちも彼に全幅の信頼を寄せていることが窺える。

ドミニク・チータムは、クリストファー・ロビンに関して、「安全の象徴」であり、「完璧な親」だとも述べている。確かに彼は、動物たちが助けを必要としたときに必ずいてくれる存在である。しかし彼は、必要以上に他の動物を気かけたりはしない。彼自ら、問題を探したり、解決することはない。彼は、他の動物が困って助けを請う時にだけ、手助けをする。

子供は何に関しても最初から最後まで大人に束縛されることを好まないが、最後は大人の助けが必要となることが多い。ミルンはそのことをよく熟知しており、子供の豊かな発想を自由に働かせるため、手助けが必要な時まで干渉せず見守ることが、子供の為だと考えていたのではないかと想見する。そして、その姿勢を、作品のなかで大人の立場に最も近いクリストファー・ロビンに当てはめたというわけである。

## 第2章 世界観について

### ○作品の舞台、「百ちよ森」について

次に、この作品の舞台設定、そして全てのキャラクターに共通する考え方など、より巨視的な視点でこの作品を考察していきたい。

まずは、プーたちの住む、百ちよ森と言う舞台について言及する。百ちよ森という舞台で一番特徴的と思われることは、公共の機関が一つもない

事である。学校や公園も無ければ、みんなが必ず集まるお約束の遊び場のようなものも無い。

しかし、そこに住むキャラクターと同じ目線で百ちよ森をみつめると、百ちよ森全体が、一つのコミュニティではないかという考えに至る事が出来る。

作品に登場する殆どの動物たちの精神年齢は、おそらく小学校などで学び始める前の段階であると考えられる。それぞれのキャラクターに人間的な感情は豊かに見られるが、社会的な知識、科学的な知識などのアカデミックな領域は、あまり通じていないようである。

実際の学齢期に達していない時期の子どもを見ても、この作品における百ちよ森の環境と非常に似通う部分がある。例えば、学校に通うようになった子どもは、家庭、そして学校と、二つのコミュニティを持つことになる。そして、学校というコミュニティでは、自分勝手ではなく、組織的な行動を求められ、社会というものを学んでいく。しかし、学校に通い始める前の子どもはどうだろう。そこにあるのは、家庭を中心とした一つのコミュニティだけである。宿題などのような、やらなければならない事柄は基本的にはなく、家の中で、あるいは家の外で、時には近所の子どもたちと体を動かし、頭を使い、様々な体験を通して自己の感性を拡げてゆく。

これは、プーたちの生き方そのものである。百ちよ森と言う舞台は、つまり学齢期に達する前の子どもが生きる世界観なのだ。ミルンは公的な機関を意図的に描かない事で、社会的な要素を徹底的に省き、その時期の子どもしか持ちえない、特異であり、かつ魅力的な視点を、物語の中のキャラクターに持たせているのである。

### ○キャラクターの共通意識

次に、この作品の登場するキャラクターにおいて、全体に及んで見られる物事の考え方、いわば共通の意識に焦点を当てる。

私がこの物語に感じる、キャラクターの共通の意識とは、「個人の尊重」と「全体の調和」である。

この概念がもっとも端的に表れているのは、『プー横丁にたった家』の9章である。フクロウの

家が前章で倒れ、壊れてしまい、新しい家を森のみんなで探すことになるが、他のキャラクターの家に殆ど訪れたことの無いイーヨーは、無自覚にコブタの家を、自分が見つけたフクロウの新しい家としてみんなに紹介してしまう。しかし、コブタは、それは自分の家だと主張することはない。そして最後には、主人公のプーが、「自分の家に来て、一緒に住めばいい」と提案し、ハッピーエンドを迎える。

この場面でまず見られるのが、コブタの自己犠牲の精神である。コブタは、何も引っ込み思案で自分の家だと言いだせないわけではない。新しい家が見つかったフクロウと、フクロウの為に新しい家を見つけることができたイーヨーの喜びを大事に考え、自分の家を犠牲にして沈黙を貫いたのである。

クリストファー・ロビンは、そんなコブタを気遣い、今後の生活の当てを問うが、コブタは答えることができない。しかしそこで、プーが「コブタは、ぼくんちへきて住むさ」と、場を幸せにまとめる素晴らしい提案を発し、コブタが「プー、ありがと、ぼく、とてもよろこんで」と応じ、幕が下りる。

この作品の中では、誰かの幸せの為に、他人が不幸を背負うことが一切ない。時には、フクロウの家さがしのような仲間の協力によって、コブタのような自己犠牲の愛によって、プーのような素晴らしい考えによって、場は幸せにまとまる。

ミルンは、作家と言う生き方を通じて、戦争に反対し平和主義を唱え続けた人物でもあった。争いの無い世界、ミルンにとっての理想郷を彼はこの物語で描いた。彼は世の中の無駄な争いを一つでも減らしたいと考え、みんなが互いに他人を思いやり、協力し合うことができれば、みんなが幸せでいられるという理念を、子どもたちに伝えたかったのだと推論する。

### ○教訓性がないこと

この作品は、児童文学というジャンルに括られる作品であるが、そのジャンルの作品群の中で、決定的に異なる部分がある。それは作品の中にはっきりとした教訓性が見られない事である。

児童文学の多くには、悪事を働いたものは最後に懲らしめられ、善い行いをしたものは最後に報われるといった勧善懲悪であったり、子どもたちに道徳的な考え、一つの教訓を教え込ませるといった側面を有している。

しかしミルンの描く作品世界には、そのような教訓が明示されることはない。

ミルンは、子どもの世界を、子どもの感覚、子どもの思考で描いている。教訓とは、一つの一般論であり、理屈が伴った考えである。しかしこれは、幼い子供の領域では無い。教訓とは、経験や理論によってあくまで理知的に導かれるべきものである。しかし、学校に通い始める前の子どもが、そのような思考のプロセスを持つだろうか。

教訓を子どもに伝えることが、有益な一面を持つことは、確かである。しかし、その教訓の裏側に潜む理屈を、子どもが学びとすることは難しい。しかし、ミルンが描く世界は、そのすべてが、子どもにとって自然に受け取ることができるようにつくられている。

この物語は、ファンタジーである。しかし、内容を深く注視してみると、そこに描かれているのは、徹底した幼い子どもにとってのリアリズムなのである。

### ○終わりに

今回、キャラクターと世界観という観点から作品を考察してみて、改めて感じたことは、この物語の奥深さは、幼い子供の世界、思考をありのままに表現したことで生じているということだ。この物語が、世界中で末永く受け入れられているその答えは、幼い子どもの世界の普遍性を、動物たちが生き生きと暮らす架空世界で、楽しく軽妙な文章でひたすら自由に、なおかつとことんリアルに描いた、古今東西で唯一の作品であるからだと、改めて作品と向き合って感じた次第である。

#### 参考文献

Milne, A.A., Winnie-the-Pooh, PUFFIN BOOKS, 1926  
Milne, A.A., The House At Pooh Corner, PUFFIN BOOKS, 1928  
石井桃子訳『クマのプーさん』岩波少年文庫、1956年  
石井桃子訳『プー横丁にたった家』波少年文庫、1958年  
安達まみ著『くまのプーさん 英国文学の想像力』光文社新書、2002年

ジョン・T・ウィリアムズ著、小田島雄志、小田島則子訳  
『クマのプーさんの哲学』河出書房新書、1996年  
ドミニク・チータム著、小林彰夫訳  
『「くまのプーさん」を英語で読み直す』NHK ブックス、2003年  
日本イギリス児童文学会編『英米児童文学ガイドー作品と理論ー』  
研究社出版、  
2001年